SIHDA（国際古代法史学会）2022 ブリュッセル大会参加記

吉村朋代

2022 年 9 月 13 日から 16 日の 4 日間にわたり、ベルギーのブリュッセルにおいて、フェルナン・ド・ヴィシェ記念国際古代法史学会（SIHDA）第 75 回大会が開催された。３年ぶりの対面会合である。2019 年 9 月にエディンバラで、「また来年、今度はチリで会いしましょう」と、皆とハグして笑顔で別れたが、その半年後から新型コロナが世界中で猛威を振るう。2021 年 1 月のサンチャゴ（チリ）大会は延期となり、翌 2022 年 1 月もオンライン開催になった。そして、2022 年 9 月、第 75 回大会は再び対面に戻され、ブリュッセルの旧市街に位置する開催校、サン・ルイ大学（l'Université Saint-Louis – Bruxelles）に、約 120 名が集まった。例年に比べると、少し小規模になったが、参加者はみな、再会と互いの無事を喜び合い、いつもの SIHDA 大会が戻ってきたことをとにかく心から喜んだ。

もっとも、感染が十分終息していたわけではなく、また交通の混乱も各所で続いていたことなどから、参加者は、近隣の英欧諸国からが多くなった。例年、南米からはたくさんの参加者があるところ、僅か 2 人に留まった。いつもよりこぢんまりした会になったという印象は、明るく賑やかで、楽しい雰囲気をつくってくれる南米グループが不在だったせいかもしれない。日本からは、私の他にもう一人、一橋大学大学院博士課程で、2022 年 6 月から 2023 年 3 月までの予定でハンブルク大学に客員研究員として留学中の勝又崇氏が初参加した。本来は、2022 年夏からイタリアのフィレンツェで在外研究中の宮坂渉氏、宮坂真依子氏も参加・報告の予定であったが、直前の新型コロナ感染で残念ながら参加できなかった。宮坂両氏だ

けでなく、報告予定者の欠席は何件かあった。

新型コロナ禍の中での対面開催には、賛否あったらしい。世界中から参集する国際学会にとって、今回のようなパンデミックはひとたまりもなく、終息を待つしか再開の手立てはない。ただ、この間にオンライン会合が世界的に定着し、国際学会でも自宅にいながら参加できるようになったことは画期的と思われる。前回の SIHDA 大会もオンライン開催であったが、時間と経費の大幅な節約は確かなメリットとして実感した。こうしたオンラインの形式は、参加の敷居をずっと低くするだろうし、学生などより多くの人がローマ法のインターナショナルな議論に触れる機会になるのかもしれない。しかし SIHDA プログラムのルーティーンは、学術的な講演やセッションに留まらない。毎日、コンサートやなにがしかのイベントがあり、食事を共にし、最終日には華やかなディナーで打ち上げ、最後にはエクスカーションありと、集まりをみんな揃って「楽しむ」ことも大きな要素になっている。学術的な講演やセッションも、ローマ法という学問を皆で「楽しむ」場とも捉えられる。SIHDA 初参加の勝又氏も、こうしたプログラムが特徴的だと語ってくれたが、日を追うにつれ、その表情がほぐれてきたようにお見受けしたのは、このプログラムのおかげかもしれない。SIHDA は、初めて参加しようとも、「ローマ法」という共通のことばで繋がり、「ローマ法」という伝統ある学問に対する敬意さえあれば、誰でも受け入れる寛大な連帯である。それには、こうした共に過ごす時間が実に重要であり、この場の共有が、互いの信頼と尊敬を確たるものにし、立場や年齢に関わらず自由な議論のできる学問的連帯をつくる役割を果たしているように思う。3 年ぶりの対面会合で、あらためて、SIHDA

の連帯の方法を再認した気がする。

さて、こうしてブリュッセル大会はいつも通りに始まった。冒頭、学部長らの挨拶では、フランス語、英語、ドイツ語と多言語が使用され、ベルギーがインターナショナルで開かれた国であることが強調された。学生相手の通常の講義でも、同様に多言語が使用されるらしい。実際、ベルギーの人に聞けば、子どもたちも小さい頃からマルチリンガルで、オランダ語、英語、ドイツ語など不自由なく使えるということだ。地図を見れば頷けるが、羨ましい限りである。言葉の壁が低く、地理的にも列車一本で英国も含めヨーロッパ各地にアクセスできる。EU 本部がここにあるのは大いに納得のいくところである。日本とは正反対の風土とメンタリティーを感じた。

大会のテーマは、Ius et Religio－Droit, religions anciennes et christianisme dans l'Antiquité（「法と宗教—古代世界における法、古代宗教、キリスト教」）で、初日に全体講演が２つあった。２日目から４日目にかけて予定されていた個別報告は６１あり、パラレル・セッション形式で３室に分けられ、１つにつき報告２０分、質疑応答１０分のスケールで実施された。個別報告は、テーマの性質上、市民法大全などの法律資料だけでなく、非法律資料や碑文を材料にする報告も多く、多彩であった。

2022 年は、SIHDA 創立８０周年にあたり、その節目を記念して、創設の地ブリュッセルで開催されたものだ。4 日目にすべての個別報告が終了した後で、SIHDA 代表で、リエージュ大学のジャン＝フランソワ・ジャーカン氏による、SIHDA の歴史とあゆみを振り返る全体講演が行われた。四半世紀前の 1996 年、第５０回大会もブリュッセルで開催され、最初期のメンバーであるジャン・ゴドメ氏が

「Premiers pas. Les premières années de la société d'histoire des droits de l'antiquité（第一歩：SIHDA の最初の時代）」として SIHDA のあゆみを語ったことから、８０周年の記念すべき回においても、SIHDA の足跡を辿り、参加者と共有しようというものであった。

全体講演を簡単に紹介したい。この講演では、まず、創設者のフェルナン・ド・ヴィシェ氏（1885-1964 年）の人と経歴が語られ、続いて学会の歴史が紐解かれた。この学会の始まりは、第二次大戦のさなか、1942 年にフェルナン・ド・ヴィシェ氏がベルギーの大学で、同僚十数人を招いて、古代法について議論したことが端緒とされる。それを拡張し、最初の国際学会が 1945 年 12 月にブリュッセルで開催される。別の資料によると※、この最初の学会は、ベルギー人の参加者以外では、ゴドメ氏などフランス人が４人、イギリス人が２人、スイス人とオランダ人が各１人のささやかな国際的スタートだったらしい。翌年の第２回からは、毎年９月にブリュッセルで開催されている。1951 年の第６回大会において転換があった。翌年の第７回大会をブリュッセル以外の場所、つまりフィレンツェとシエナで開催すること、及び、統一テーマを設けることが決定されたのである。最初のテーマは「古代諸法における売買契約の締結」であった。こうして、第７回以降、毎年場所を変えて、また統一テーマを設けて学会が開催されるようになり、今に至るスタイルに定着した。第８回はバルセロナ、第９回はナンシー、第１０回はブリュッセルに戻った。その後は、ライデン／アムステルダム、オック

※ Jean-François Gerkens, SHD : Fernand De Visscher et la Société Internationale des Droits de l'Antiquité Conférence du 14 janvier 2012（https://hdl.handle.net/2268/108245）

スフォード、トリエステと続き、第１４回で初めてドイツの地、フライブルグ／バーゼルで開催されている。

1963 年の第１８回ブリュッセル大会が、創設者フェルナン・ド・ヴィシェ氏の主催する最後の大会となった。翌 1964 年、彼は病のため亡くなる。フェルナン・ド・ヴィシェ氏は、この学会が、法的な組織ではなく、友情と学問的協働の絆で結ばれたものであることを望み、そのように運営してきた。その創始者にして主催者亡き後の最初の学会、第２０回大会はパリで開催された。ここで再び重要な決定がなされる。年一回の開催は維持すること、そして、ゴドメ氏の提案により、学会の運営委員を前年、当年、翌年の主催者３名で行うというもので、これも今に至るまで続いている。1966 年のサラマンカで行われた第２１回大会で、学会の名称が現在の「Société Internationale Fernand De Visscher pour l'Histoire des Droits de l'Antiquité」に決定され、頭文字をとって SIHDA と呼ぶことになった。この呼称は今や定着している。もう一つ、現在まで続く慣例プログラムに、学会後のエクスカーションがある。最初のエクスカーションは、1950 年ブリュッセルでの第５回大会に始まっている。その記念すべき行き先は、ヘントであった。それゆえ、2022 年、８０周年のブリュッセル大会のエクスカーション先には、再びヘントが選ばれた。

このようにして、第７５回まで続いてきた学会の様々なエピソードが、ジャーカン氏によってユーモアを交えて語られた。あらためて知ることも多く、また 80 年という長きにわたり、また 75 回にわたって毎年開催されてきた学会の背骨が理解できたように思う。ローマ法は日本だけでなく他国でも、相対的にマージナルになるつつあるようで、しばしば嘆きの声を聞く。それにもかかわらずこの大

会の参加者は徐々に増えてきているのは、この学会の魅力のせいであろう。創始者の大切にしていた「友情と学問的協働の絆」は、確かに、世界に広がっている。

すべての講演と報告が終了した後、4 日目の午後から、ブリュッセル王宮の隣にあるアカデミー宮殿に移動して、総会が開かれた。総会での定例として、前回の学会以降に亡くなられた学者同僚の追悼が行われた。今回は 3 年間ということもあり、15 名にのぼった。例年は、ゆかりのある者が登壇して、一人一人故人を紹介し追悼の辞を述べるが、今年は代表のジャーカン氏が、個人全員の業績や学会でのエピソードを紹介し、最後に皆で黙祷を捧げた。ここに 15 名のリストを挙げておく。ローマ法学に多大な貢献をされ、さらに日本の研究者と関係の深い方も多く、リストからは大きな喪失感を感ぜずにはいられない。

1. Shafik Allam (1928-2021)
2. Carlo Augusto Cannata (1934-2019)
3. Amalia Castresana (　-2022)
4. Manuel Garcia Garrido (1928-2021)
5. Vincenzo Giuffrè (1940-2019)
6. Alejandro Guzman Brito (1945-2021)
7. Ireneusz Jakubowski
8. Rolf Knütel (1939-2019)
9. Margaret Hewett (　-2022)
10. Matteo Marrone (1929-2020)
11. Giovanni Negri (1940-2020)
12. Marko Petrak (1972-2022)
13. Eric Pool
14. Witold Wolodkiewic (1929-2021)
15. Pierpaolo Zamorani (1939-2021)

個人的には、2019 年のエディンバラで、エリック・ポール氏から

丁寧なアドバイスをいただき、また次回にお話しできるものと思っていたため、突然のご逝去にたいへん驚き、本当に残念でならない。謹んで哀悼の意を表したい。

また、総会では、これも恒例だが、次回以降の大会の紹介・案内のプレゼンテーションが行われた。次回第 76 回大会は、2023 年 8 月 22 日から 26 日までの日程で、フィンランドのヘルシンキで開催される。ヘルシンキ大学のガイウス・ツオリ氏とスタッフがプレゼンテーションに立った。次回のテーマは、「古代法の有形性と無形性 Materiality and immateriality of ancient law」であり、すでにホームページでも公開されている。

さらにその次の第 77 回大会は、周知のように、大阪での開催が決まっている。代表の大阪大学・林智良氏は、大学業務のためセッションへの参加は適わなかったが、総会でのプレゼンテーションには無事間に合った。SIHDA には友人も多い林氏であり、登壇は大変好意的なムードで迎えられた。九州大学・五十君麻里子氏作成のパワーポイントにも助けられ、SIHDA 2024 OSAKA のプレゼンテーションは、充実した内容で参加者を惹きつけた。特に、西村重雄氏直筆の大会ロゴの紹介では、会場全体から歓声があがり、会場の期待値は大いに高まった。

もっとも、2024 年の大阪開催の情報は、すでに学会の初日から多くの参加者が共有していた。こちらから参加を呼びかける前に、会期中、ランチやコーヒーブレイク、イベントの合間に、参加を予定している、この機会に日本を巡りたい、楽しみにしているなどと、多くの参加者からしばしば声を掛けられた。日本文化に関心も造詣も深い人も多く、遠い地での開催を皆が楽しみにしていた。

2024 年の大阪大会は、SIHDA 創立８２年目にして、東アジアで初めて開催される大会となる。SIHDA の歴史に新たな一歩となるはずだ。大阪大会の会期は、2024 年 9 月 23 日から 27 日まで、大阪大学豊中キャンパスをメイン会場にして開催する。テーマは、Ius／Lex。現在、通称「五人委員会」（林智良、栗原麻子、五十君麻里子、佐々木健、吉村）で、企画立案を進めている。多くの方にご協力を仰ぐことになるが、2024 年を機に、ローマ法の「友情と学問的協働の絆」が、極東の地でも広がることを期待している。